［原著論文］

浅賀ふさの生涯に関する研究

田中　秀和

キーワード：浅賀ふさ，日本社会福祉史，ソーシャルワーク

A study on the life of Fusa Asaka

Hidekazu Tanaka

Abstract

As a pioneering medical social worker in Japan, Fusa Asaka is widely recognized even today for her achievements. She is a figure who will always have a place in the history of Japanese social welfare. The first purpose of this paper is to examine the life of Fusa Asaka, as research within social welfare studies on a prominent figure in the field. Another aim is to study how Asaka lived, and use that as an aid to securing future human resources in the welfare field.

"Women Pioneers 7: Fusa Asaka and Medical Social Work," a DVD focusing on Fusa Asaka, was used as one resource for this research. New historical facts were discovered in this material, such as remarks on the International Women's Year, which had not been uncovered in previous research on Fusa Asaka. Also, Fusa Asaka's way of life shows that the motivations which inspire an interest in social welfare are not uniform, and elucidating this way of life can be useful for securing future human resources in the welfare field.

Key words：Fusa Asaka, history of Japanese social welfare, social work

要旨

浅賀ふさは、日本における医療ソーシャルワーカーの先駆けとして、今日に至るまで広くその業績が認められ、日本社会福祉史に残る人物のひとりである。本稿では、社会福祉学における人物研究として、浅賀ふさの生涯を紐解くことを第一の目的とした。併せて、浅賀の生き方を研究することにより、それを将来の福祉人材確保の一助とすることを目指した。

研究のなかでは、ひとつの材料として、彼女を取り上げたDVD作品である「Women Pioneers－女性先駆者たち７　浅賀ふさと医療社会事業」を用いた。そこでは、これまでの浅賀ふさに関する研究では明らかにされることのなかった、彼女が渡米中に現地の婦人参政権獲得運動とその成果を目の当たりにしたというエピソードや、国際婦人年を受けてわが国の家庭内の子育てにおける男女同権（同位）意識の弱さを問題視する発言等があり、

立正大学　社会福祉学部　社会福祉学科

［責任著者及び連絡先］　田中　秀和
立正大学　社会福祉学部　社会福祉学科
〒360-0194　埼玉県熊谷市万吉1700
E-mail：tanaka.hidekazu@ris.ac.jp

投稿受付日：2017年５月15日
掲載許可日：2017年10月12日

新たな史実が発見された。また、浅賀ふさの生き方は、社会福祉に関心をもつきっかけは一様ではないことを示しており、このような生き方を明らかにすることは、将来の福祉人材確保にも活かせるものであるといえる。

Ⅰ　はじめに

浅賀ふさは、日本における医療ソーシャルワークの先駆者である。これまで、社会福祉学における発達史研究のなかでは、浅賀ふさに焦点をあてた先行研究が散見される。本稿では、文献研究に加えて、浅賀ふさの生涯を追うための新たな研究材料として、彼女自身がインタビュー形式で、自らの人生を語っている上記の映像作品を用いた。

浅賀ふさの人生を追うことは、ソーシャルワーカーになるきっかけやその成長過程を追うことにも繋がることになり、将来の福祉人材確保にも貢献するものと考えられるため、その点についても、以下では考察を加えることとする。

Ⅱ　研究材料と方法－「Women Pioneers－女性先駆者たち」の概要

研究材料のひとつである映像は1976（昭和51）年にインタビュー形式で収録された。左記映像は、31分間の収録時間であった。当該インタビューが行われた背景には、1975（昭和50）年の国際婦人年の影響がある。

この映像シリーズが作成された理由について、制作に携わった渡辺は以下のように述べている[1)]。

1975年国際婦人年にメキシコ世界女性会議に集まった女性たちは国連、国際機関、各国政府にたいして膨大な要望リストを提出し、なかでもメディアに対しては「ステレオ・タイプでなく積極的でダイナミックに生きる女性像」を伝えることを強く要求しました。

日本からの世界会議参加者は極めて少数で、国内の関心も低く、政府代表団に加わっていた女性代表は「日本政府は言いたいことを言わせてくれないだろう」とメディアにコメントする始末でした。「もし、市川房江さんが参加されたら…」「本人を送れないなら映像で世界に送ろう！」

上記の理由により企画が始まり、女性先駆者のひとりとして選出されたのが浅賀ふさであった。当該シリーズは、浅賀ふさを含め計10名が登場する。

その後、渡辺はこれらの映像を、財団法人大阪府男女共同参画推進財団に寄贈し、同財団は、ビデオのDVD化と書籍化に向けて2010（平成22）年にプロジェクトチームを発足させた。DVDと書籍が完成したのは、翌2011（平成23）年であった。

本稿では、上記において浅賀ふさが出演している映像を入手し、そこで語られている彼女の人生を、これまで公表されている先行研究とあわせて考察することにより、新たな史実への探求を行う。

また、ソーシャルワーカーの先駆者である浅賀ふさの人生を追うことは、ソーシャルワークに関心をもったきっかけや、その成長過程を考える上でも示唆を得るものであり、その点についても将来の福祉人材確保やソーシャルワーカー像の視点から考察を加える。

Ⅲ　結果

1　浅賀ふさの人生―社会福祉と出会うまで

本稿は、研究対象作品で取り上げられている人物である浅賀ふさの経歴を紐解きながら、それに平行する形で上記DVD内における発言を随時挿入することにより、考察を進める。社会福祉学の人物研究を行う意義について、蜂谷は以下のように述べている[2)]。

社会福祉における歴史研究は、実践に対しては直接的な有用性を示すことはない。しかし、実践に対して直接的に有用性がないということは、その時代状況からはある程度自由になるということであり、長い時間の流れの中における現状の分析や実践のあり方についての評価が可能になると考えられる。ゆえに、社会福祉における実践の行き過ぎや誤った方向性を修正する役割は、歴史研究に課せられた役割でもある。

また、“福祉は人物である”とも言われるように、どのような実践をなすかは、その人物の思想を背景にもつ。そして、そこには歴史的な制約も反映される。それゆえ、社会福祉において人物史を研究することは、その人物の思想と実践の両面を、時代状況を含めて捉えられるという利点がある。

上記の指摘は、本稿の研究課題である浅賀ふさにもあてはまる。彼女の生涯を考察することで、歴史研究に課せられた役割を遂行していきたい。

浅賀ふさは、1894（明治27）年２月17日に愛知県知多郡にて誕生した。旧姓名を小栗将江と名乗り、父の名を富次郎、母の名をしげという。浅賀ふさという氏名は、結婚後のものである。浅賀ふさの生涯を年表として**表１**のようにまとめた[3)]。

彼女の定位家族は、金融や酒造等で稼いだ資金を豊富にもち、母親のしげは、15歳で嫁ぎ、夫を支える妻としての生活を送っていた[4)]。浅賀ふさは、自身の母親の生

表１　浅賀ふさ　年譜

1894（明治27）年	愛知県知多郡半田町に生まれる
1909（明治42）年	日本女子大学校附属高等女学校卒業
1916（大正５）年	日本女子大学校英文科卒業
1926（大正15）年	シモンス女子大学大学院社会事業学校卒業
1927（昭和２）年	ハーバード大学大学院教育学専攻
1929（昭和４）年	聖路加国際病院社会事業部
1930（昭和５）年	聖路加女子専門学校講師
1933（昭和８）年	聖路加国際病院作業治療部
1947（昭和22）年	厚生省児童局嘱託
1948（昭和23）年	東京家庭裁判所調停委員
1948（昭和23）年	東京都民生委員
1950（昭和25）年	日本社会事業大学非常勤講師
1953（昭和28）年	中部社会事業短期大学講師
1953（昭和28）年	中部社会事業短期大学助教授
1953（昭和28）年	日本医療社会事業家協会会長
1955（昭和30）年	静岡県立保育専門学校非常勤講師
1956（昭和31）年	中部社会事業短期大学教授
1957（昭和32）年	日本福祉大学教授
1959（昭和34）年	名古屋大学附属助産婦学校非常勤講師
1959（昭和34）年	明治学院大学大学院非常勤講師
1964（昭和39）年	日本福祉大学附属人間関係研究所所長
1964（昭和39）年	名古屋市児童福祉審議会委員
1964（昭和39）年	名古屋市青少年問題協議会委員
1965（昭和40）年	愛知県児童福祉審議会臨時委員
1966（昭和41）年	日本福祉大学嘱託教授
1974（昭和49）年	日本福祉大学退職
1974（昭和49）年	日本福祉大学名誉教授
1986（昭和61）年	死去享年92

き方に対して疑問をもち、自らは母のような生き方を肯定的にみることができなかった。

その後、家族からの応援もあり、彼女は、13歳で東京にある日本女子大学校附属高等女学校へ入学する。同校を卒業後、浅賀ふさは一旦ふるさとへ戻るが、「結婚こそが女性の幸せ」との両親の考え方に馴染むことができなかった。浅賀ふさは、女性の自立に憧れをもち、それを実現する手段を探していた。

彼女には兄の常太郎がいた。常太郎は、19歳のとき留岡幸助に連れられてアメリカに留学した経験をもつ。その後飛行機の操縦技術を習得した彼は、三井物産の飛行士となり、1919（大正８）年再び渡米することとなった。常太郎の渡米に対し、家族は反対したが、浅賀ふさは彼を支持した。彼女は常太郎に同行することとなったのである。

当時、彼女の心境は以下のようであった[5)]。

「とくに何をやりたいという目的をもった渡米ではなかったが、当時の米国人の男女が自由にふるまっているのを見て、女性の新しい生き方を教えられ、金持の家にメイドとして住みこみ、そこの老婦人の世話をしながら学資をかせぎ、美術学校にゆき、興味をもっていたデザインの勉強をはじめることになった。」

この時点では、浅賀ふさと社会福祉や医療ソーシャルワークとの関連は見受けられない。彼女は、渡米中、今日でいうところの、モラトリアム期間を過ごしたといえよう[註1)]。兄と同行して渡米をしたものの、その後、兄は帰国。彼女はひとりアメリカに残ることとなった。

浅賀ふさと社会福祉を結びつけたきっかけは、この渡米中に起こる出来事によることになる。

彼女は当時、30歳代に近づいていた。上記DVDのなかで、彼女は当時、社会福祉に関心をもつことになった背景と出来事について、以下のように語っている。

「私は、お友達がみんなお母さんになっている30歳代

に近づいて、子どもをいくらかでも助けるようなことをしたい、と考えるようになりました。それに働き先のフィッシャーさんのお店での体験もあります。…（略）…その中に授産事業があり、扱う品は、赤ちゃんの縫いぐるみです。私たちが顔の部分を作り、障がいのある方がボディに詰め物をしていました。それから、私は絵を勉強していたので、子どもたちへの愛情があふれ出るようなお店のポスターをたくさん作りました。そういうことから、社会事業に首を突っ込みたくなったわけです。」

2　浅賀ふさの人生―社会福祉との出会いから、医療ソーシャルワーカーへ

上記の理由により、彼女は社会福祉の世界とつながりをもつこととなり、シモンズ女子大学大学院へ進学した。そこで浅賀ふさが受講した講義科目は、「人間行動の諸要素」、「精神医療社会事業」、「子どものための社会事業」、「臨床精神医療」、「社会組織論」、「地域組織論」、「ソーシャルケースワーク」、「公衆衛生論」、「社会経済論」、「家族経済論」であった。さらに、２年次には、ボストン家族福祉協会とピーターベント・ブリガム病院でフィールドワークを行った[6)]。

上記のように、シモンズ女子大学において彼女が学んだ内容は、ケースワーク等のみならず、広く社会を知るための科目も含まれている。ここで勉強したことは、後年、彼女自身がソーシャルアクションの活動家として活躍する素地となっているといえる。

その後彼女は、ハーバード大学教授で医師であるキャボット氏と出会った。キャボットは医療機関における社会福祉の重要性を理解し、世界に先駆けて1905年に医療社会事業を開始した人物である。彼女はキャボット医師から大きな影響を受けた。

R・Cキャボットは、社会福祉活動に理解のある医師であり、「どんなよい治療も患者が実行できないものであったら何の役にも立たない。発病と関係のある社会的困難に誰かが相談にのってやる必要のある患者は多い」とする考え方をもっていた[7)]。

もうひとり、浅賀ふさに影響を与えた人物としてトイスラー医師がいる。同氏は、1901（明治34）年に東京にて聖路加病院（現・聖路加国際病院）を開設し、初代院長を務めた人物である。トイスラー医師は、人々の悩みを聞いて、患者に役立つためのモデル病院をつくりたいとの意図をもった人物であり、彼女はトイスラー氏に自身を日本の病院で医療ソーシャルワーカーとして採用するように手紙を送った。その結果、彼女は見事に聖路加国際病院に採用されることとなり、医療ソーシャルワーカーとしての人生をスタートすることとなる。

浅賀ふさが就職した聖路加国際病院は、当時の病院としてユニークな存在であった。当時の病院の特徴は、児島美都子から伝えられているが、それをまとめると以下のようになる[8)]。

・当時、日本の病院では病院給食は一般に行われておらず、廊下にコンロをおいて家人が調理し、患者に食べさせていた。しかし、聖路加国際病院では専門職として栄養士が採用され、その指導による病院給食が行われていた。
・寝具は自宅から運んでこさせるのではなく、病院が備えつけたものを提供していた。
・病院スタッフは、内科（二科）外科（二科）小児科（二科）皮膚・泌尿器科・眼科・歯科・レントゲン科・耳鼻咽喉科・産婦人科の各々について、シニア・ドクター１・中堅ドクター１、若い医師数名、インターン医学生が配置されていた。また看護婦は、婦長のほかに相当数の看護婦・学生看護婦がおり、他のスタッフとして保健婦・ソーシャルワーカー・事務員・栄養士・ハウスキーパー・病院牧師等、他の病院にはみられない、多様な職種が就業していた。
・当時としてはめずらしく、医師と看護婦の関係は上下関係ではなく、対等な関係であった。

上記のような特徴を有する聖路加国際病院の患者は当時、有料患者と施療患者に分類されていた。当時は生活困窮者のための制度として、救護法が制定されていた。浅賀ふさがソーシャルワークを行ううえで、対象となった患者のなかには、当該法の対象者が主であった。

彼女が行ったソーシャルワークは幅広いものであった。その内容は以下のようなものであった[9)]。

「パイオニアの意気込みに燃えて結核相談をはじめ性病相談を開始。また、活動は病院内にとどまらず、訪問看護とタイアップして地域の公衆衛生活動にも力を入れた。これらは、のちに保健所が創設される時のモデルとなった。」

また、浅賀ふさ自らが、当時の患者に対する想いや業務内容について、以下のようにまとめている[10)]。

「私は昭和四年に仕事を始めた時受付とカルテの記入を全部自分の仕事としてケース発見の問題を解決したし、私の学んだボストンの市立病院の受付は経験のある中堅SWが当たって居ましたが、これは問題を早く発見して援助の手を延べようとの意図からでした。」

浅賀ふさは入職当初、結核相談所で勤務した。当時の病院スタッフの反応とそれへの対処法について、髙橋は以下のように報告している[11)]。

当時、病院内において医療社会事業を理解している人は誰ひとりとしておらず、浅賀ふさ自身病院内の人びとの心理を十分把握しないまま、医療社会事業の機能や目的を書いたものなどで理解してもらおうと努めるより、実際に仕事で医師の診断と治療の助けになる機会をとらえて理解してもらおうと考えた。

上記の記述は浅賀ふさ自身が、他職種との連携の重要性を当初から理解していたこと、またそれを強めるために機会をみて、実践を行っていた様子を知ることができる。

浅賀ふさが勤務した医療社会事業部が開設されたことは、聖路加国際病院の公衆衛生看護事業の充実にも寄与した。浅賀ふさは、当時、その専門性が未成熟であった保健婦との連携を進めた[12)]。

さらに浅賀ふさは、患者を身体的側面のみならず、精神的側面からも考慮するために「作業治療部」の開設にも携わった。彼女はそこで、ソーシャルワークを実践したが、当時の苦労を以下のように述べている[13)]。

仕事が専門的に理解されておらず、今日の医療社会事業の理解のない病院におけるワーカーと同様の悩みは多く、医師が患者を作業治療部に送ってくることは殆どなく、私の方から頼みに行くという始末、然も医師はそんなもの必要でないような格好しかしませんので、草わけの苦しみを再びしなければなりませんでした。

上記は、医療ソーシャルワーカーの草分けとしての苦労の一端を知ることができるものである。このような先人の苦労が、今日に至るまでの医療ソーシャルワークの発展に寄与していることは相違のない事実であろう。

3　浅賀ふさの人生―医療ソーシャルワーク以外の活動

浅賀ふさは、1938（昭和13）年、47歳のときに結婚のため病院を退職する。結婚相手は、衆議院議員の浅賀長兵衛であった。しかし、1945（昭和20）年に長兵衛は死去。短い結婚生活であった。

彼女が医療ソーシャルワーカーとして活躍すると同時にはじめた活動がある。それは、婦人参政権獲得運動への参加であった。当時の状況について、浅賀は上記DVDのなかで以下のように語っている。

「アメリカにいたときに選挙運動をみましてね。それは賑やかなものでした。第一次世界大戦直後の1920年に、アメリカの婦人は選挙権を得たのです。いろいろ驚きで、私には、こういう世の中の方があうと思いました。夫と妻が、お前とか、あなた、ではなく、互いに同じ呼び方をしている。男の人が女の人を大事にする、という最初の印象でした。」

上記の活動は、1937（昭和12）年の母子保護法制定に結びつくこととなった。このように、浅賀ふさのソーシャルワーク実践は、ケースワークに留まらず、コミュニティオーガニゼーションやソーシャルアクションの手法を駆使したものであったといえよう。

病院を退職した浅賀ふさはその後厚生省に勤務し、児童福祉法制定等に携わったあと、東京家庭裁判所調停委員や東京都民生委員等を経て、1953（昭和28）年に中部社会事業短期大学に着任する。

ソーシャルワーク実践から教育の場へフィールドを移した理由とそこでの仕事について、浅賀ふさ自身、上記DVDのなかで、以下のように語っている。

「ケースワーカーの数が少なかったですしね。社会福祉の分野は幅広く、医療だけでなく、ケースワーカーを養成する必要がありました。私が最後まで責任をもったのは医療ケースワーカーの養成でした。今はもう大勢の方が勉強なさり、経験も長いベテランの方も大勢いらっしゃる。もう安心してバトンタッチできると思っております。」

浅賀ふさが着任した中部社会事業短期大学は、後に日本福祉大学となり、彼女はそこで長年教鞭をとった。

大学での教育に関し、その目標を問われたインタビューで、浅賀ふさは以下のように答えている。

―先生は教育の目標をどこに置いておられましたか。

社会事業の考え方です。人権の回復とか自立という線がないと怠け者を増やすという弊に陥る可能性がありますね。社会事業というのは、具体的な人間生活の細かな要素を知って打ち立てられたものなので、ソーシャルワーカーが人間同士の愛情で仕事をすることが大切ですね[14)]。

大学では、多くの著書、論文の執筆のほかに、朝日訴訟への協力[15)]、伊勢湾台風の被害者支援、安保条約反対運動、老人医療費無料化政策等へのソーシャルアクション[16,17)]など、幅広い活動を展開した。

児島美都子は、日本福祉大学在任中の浅賀ふさとのエピソードのひとつとして、上記、朝日訴訟への協力のた

め、1961（昭和36）年、朝日茂氏を訪ね、岡山療養所を訪れたエピソードを以下のように語っている[5)]。

「そのとき朝日さんは『母親に遭ったようだ』とその喜びの気持ちをあらわしたが、青年のころ母親を失っていた朝日さんにとって、ちょうど年ごろが同じであったこととあわせて、日ごろのこまやかな心づかいが母親を感じさせたものと思われる。」

これまで述べてきたように、浅賀ふさは、当時の男女におけるジェンダー観に違和感を覚え、兄の渡米という偶然を利用する形でアメリカへ渡った。当時の想いのなかには、自らの母親の生き方に対する嫌悪感も含まれていたものと思われる。

その後彼女は、これまた偶然ながら社会福祉と出会い、医療ソーシャルワーカーへの道を突き進んでいくこととなった。聖路加国際病院への就職にあたっては、自らを売り込む手紙を医師に送ってアピールするなど、当時の日本社会におけるジェンダー観を突き破るような行動ぶりであったといえる。

聖路加国際病院では、恵まれた環境のなかで、日本における医療ソーシャルワーカーのパイオニアとして責務を果たした。

第二次世界大戦後は、医療福祉の領域に縛られることなく、児童福祉分野や地域福祉分野でも活躍し、ソーシャルワーカーの養成教育の場へと足場と移すこととなった。そこでもエネルギッシュに活動を展開した彼女は、大学の仕事のみに専念するのみならず、ソーシャルアクション等を積極的に行うことによって、社会変革の一翼を担ったともいえよう。

本稿において取り上げたDVDは、上述のように国際婦人年にあわせて制作されたものであった。当該映像の最後に、浅賀ふさは、国際婦人年に対して、以下のように発言している。

「ケースワーカーとして感じるのは、日本語だけに、夫と妻との間に差別語があることです。憲法では、男女の間柄は同位のはずであり、家制度はもう脱却したのですから、おかしいですよ。日本の子どもは、お父さんよりお母さんが下、というふうにしつけられます。自分でものを考えられるようになる前に、空気か水みたいに、そういう縦の関係が取り入れられます。日本の男女同権が非常に遅れているのは、そのあたりに隠された原因があるのではないか、と私は感じています。これは、ケースワーカーとしての勘ですけどね。若い方には、男女同位の文化を新しく築いていただきたいものです。」

上記の発言における同位とは、同じ位置を意味するものである。当該映像は、1976（昭和51）年に制作されたものであり、今日の状況にそのままあてはめることはできない。しかし、今日においても必ずしも男女平等は達成したとは言い切れない面があり、浅賀ふさの発言は、現在においても価値のあるものであろう。

Ⅳ　まとめ

本稿では、医療ソーシャルワーカーの先駆者である浅賀ふさについて、その生い立ちから生涯を見つめなおす作業を行った。また、これまでの浅賀ふさに関する研究では取り上げられることがなかった、彼女自身が出演するDVDにおける発言内容に重心を置くことによって、彼女が渡米中に現地の婦人参政権獲得運動とその成果を目の当たりにしたというエピソードや、国際婦人年を受けてわが国の家庭内の子育てにおける男女同権（同位）意識の弱さを問題視する発言等、これまでの社会福祉学において学術的に検討されていなかった部分が明らかにされ、社会福祉学における人物研究において、新たな史実を明らかにした。

上記のことは、浅賀ふさが生きた時代が今日以上に男女平等が達成されていない社会であったことを示している。そのような時代に浅賀ふさは高等教育を受けたエリート女性として時代を牽引する役割を担った。

また、浅賀ふさの生涯を紐解くことは、浅賀ふさ自身が社会福祉と出会ったきっかけやソーシャルワーカーとして成長していく過程を知ることにもなる。それは、これからの福祉人材確保にも貢献するものとなるであろう。坂上は、浅賀ふさと社会福祉との出会いを述べるなかで、浅賀ふさの「社会事業教育への進学は彼女においてはむしろ結果である。あるいは彼女自身が選んだ生き方のための手段のひとつではなかっただろうか。」と述べている[18)]。浅賀ふさ自身が、初めから社会福祉に対して熱い想いをもっていたわけではなかったという事実は、社会福祉に関心をもつきっかけは多様であってよいことや、人生の紆余曲折を経るなかでいくつかの偶然に左右されながら、自らの道を進んでいくことが結果的によいソーシャルワーク実践に繋がる可能性があること等を明らかにしているといえる。

近年の教育は、中高生等の比較的早い段階からキャリア教育の推進等で、自分のやりたいことや、自らの適性を発見するよう強迫的に迫られる側面が否めない。しかし、人間の適性は、人生を歩いていくなかで発見されることも多々あることであって、学生時代に自らを将来の職業をはっきりと定め、それを叶えていくルートのみが正しいわけでは決してない。人生は偶然に左右されるものであり、それをうまく活用する能力は、浅賀ふさのよ

うに、これまでは全く知らなかった新しい仕事や自身に出会う機会を増やすことに繋がるであろう。経営学の視点からキャリア研究を行っている金井は、「キャリア・ドリフト」という概念を提出している。これは、「いいものに出会い、偶然を生かす（掘り出し物＝serendipityを楽しむ）には、むしろすべてをデザインしきらないほうがいい」との考え方をするものである[19)]。

本稿との関連で上記の概念を考察すると、キャリア・ドラフトを行うなかで、偶然、ソーシャルワーカーという職業に出会うことは望しいことと言える。しかし、今日においてもソーシャルワーカーという職業は教師や医師、弁護士等の他の対人援助専門職と比較して認知度が低いと思われる。キャリア・ドラフトを行い、偶然ソーシャルワーカーという職業を目指すことになる人を増加させるためには、今まで以上にソーシャルワーカーがメディアに登場する機会を増加させることが必要である。テレビや漫画、映画作品などにソーシャルワーカーが登場する機会が増加することは、それまで当該職業を知らなかった人が偶然それを知る機会を増やすことにつながる[20)]。また、左記のような社会環境を形成していくためには、ソーシャルワーカーの専門性の研究やその職業像の解明を深化させていく必要があるだろう。

浅賀ふさの人生は、上述のように多様な活動を展開している。本稿で詳しく取り上げることのできなかった、医療社会事業論争、朝日訴訟や老人医療費無料化政策などへの浅賀ふさの取り組みについては、別稿にて改めて明らかにしていきたい。

註

註１）今日でいうところの、モラトリアム期間とは、E. H. エリクソンが提唱した概念で、青年期にいる人間に与えられているとする、社会に出るまでの猶予期間のことである。

文献

１）渡辺晴子：「はじめに」財団法人大阪府男女共同参画推進財団編　Women Pioneers－女性先駆者たち（ブックレット），財団法人大阪府男女共同参画推進財団，第１版，はじめに，５-７，大阪，2011.

２）蜂谷俊隆：糸賀一雄の研究―人と思想をめぐって，関西学院大学出版会，第１版，はじめに，iii―iv，兵庫，2015.

３）日本福祉大学：浅賀ふさ教授年譜，研究紀要（浅賀ふさ教授喜寿記念論文集），20・21：455-456，1972.

４）日根野建：浅賀ふさ―医療ソーシャルワーカーの先達　室田保夫編　人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ，ミネルヴァ書房，第１版，221-227，京都，2006.

５）児島美津子：新医療ソーシャルワーカー論―その制度的確立をもとめて，ミネルヴァ書房，第１版，浅賀ふさ先生のたどった足どり―MSWの歴史のなかで―，156-179，京都，1991.

６）小塩和人：浅賀ふさ（小栗将江）と世紀転換期のアメリカ合衆国における医療社会事業教育，日本女子大学総合研究所紀要，５：188-194，2002.

７）浅賀ふさ：私とMSWの出合い―R・C・キャノンとI・M・キャノンに関する覚えがき―　内田守・岡本民夫編　医療福祉の研究　ミネルヴァ書房，第１版，241-258，京都，1980.

８）児島美都子：浅賀ふさ教授のたどった足どり，研究紀要（浅賀ふさ教授喜寿記念論文集），20・21：367-406，1972.

９）児島美都子：浅賀ふさ先生と日本のソーシャルワーク，ソーシャルワーク研究，21（４）：266-272，1996.

10）浅賀ふさ:『医療社会事業の機能は何か』を読んで，福祉研究，17：62-65，1966.

11）髙橋恭子：戦前病院社会事業史―日本における医療ソーシャルワークの生成過程，ドメス出版，第１版，聖路加国際病院における病院社会事業，223-265，東京，2016.

12）川上裕子：日本における保健婦事業の成立と展開－戦前・戦中期を中心に―，風間書房，第１版，保健婦事業成立の史的前提，―地域別・事業別分類による保健婦の活動，49-102，東京，2013.

13）浅賀ふさ：私の仕事をかえりみて―医療社会事業黎明の頃―，社会事業，42（６）：38-46，1959.

14）浅賀ふさ：科学者のあゆんだ道―浅賀ふさ氏に聞く（その３），日本の科学者，15（11）：604-608，1980.

15）浅賀ふさ：朝日行政訴訟事件控訴審第五回公判における私の証言要旨，福祉研究―人間と社会，10：68-79，1961.

16）浅賀ふさ：老人医療費無料化直接請求の起る背景，研究紀要（浅賀ふさ教授喜寿記念論文集，20・21：407-454，1972.

17）浅賀ふさ：革新名古屋市政における老人福祉対策―老人医療無料化に次ぐ対策―，研究紀要，24：87-131，1974.

18）坂上裕子：浅賀ふさ　五味百合子編　社会事業に生きた女性たち―その生涯としごと　ドメス出版，第

１版，245-254，東京，1973.
19）金井壽宏：働くひとのためのキャリアデザイン，PHP新書，第１版，第１版，キャリアデザインするという発想―ただ流されるのとどう違うのか，110-165，東京，2002.
20）田中秀和：医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマにおける職業像の研究，新潟医療福祉学会誌，12（２）：２-７，2012.